

# カリブ海域のクレオール言語

渡 邊 絢 子

## 1. はじめに

私たち人間にとってことばは生活上、欠かせないものであるが、ことばは固定化したものではなく、どのような時代でも、どのような場所でも常に変化している。その変化の大きな要因は、環境、社会、相手など様々なコンテキストに合わせてコミュニケーションの取り方そのものも変化し、常に新しいバリエーションが生まれるからである。

クレオール言語は奴隷制と深くかかわる環境の中で発達を遂げたといわれる特異な言語である。1492年にコロンブスの新大陸発見をひとつのきっかけとして、ヨーロッパ列強による侵略が始まり、カリブ海域の言語状況は大きく変化した。本稿では、この状況の中で言語がどのように変化し、進化したか、現在も使われているクレオール言語がどのような特徴を持つものであるか、またこの言語の将来はどのような方向に進んでいくのかについて考察したい。

本稿ではヨーロッパ列強による植民地支配と奴隷貿易の影響を強く受けたカリブ海域の言語に着目する。カリブ海は、アンティール諸島または西インド諸島と総称される島々と中米地峡、南米大陸とで囲まれた内海のことである(図1)。フロリダ半島から南米大陸のベネズエラの北側に向かって、大小さまざまな島が、全長約4000キロメートルに渡っておおきな弧をなすように連なっている。

## 2. クレオール言語とは

まず、ピジン語とクレオール語は次のように定義される。一般に、ピジン語とは互いの言語を知らない人々の間でコミュニケーションをとるために発達してきた言語を指す。言語の通じない相手に対して、自分の目的を達成するために使うものであるため、発音は話し手の母語の影響を受け、語彙の数も少なく、文法規則も簡略化されることが多い(田中・田中, 1996)。両親がピジン語を日常語として話す地域ができると、その地域で生まれた子どもたちはピジン語を母語として成長することとなり、日常のあらゆる事象を表現するために必然的にピジン語の語彙は増え、文法も複雑化していく(田中,

1996)。このようにしてピジン語から完全な言語として発達をとげたのがクレオール語である。



図 1

ピジン語とクレオール語は他の自然言語と比べ音素数が少ない、疑問文と断定文が、イントネーションの変化だけによって区別される、名詞や動詞が人称、数、性、時制などによる語形変化をしない、連結詞としての be 動詞を持たない、などの言語特徴が見られる (田中幸子, 1994)。

### 3. カリブ海域の歴史

#### 3.1 カリブ海の植民地化

本節では、ヨーロッパ各国が行った植民地政策、中でもスペイン、フランス、イギリスの3国の植民地政策について考察を行う。

まず、ヨーロッパ各国が行ったカリブ海域の植民地化の共通点を挙げる。カリブ海域では植民地化に伴い、ヨーロッパの支配による先住民の絶滅と、それに伴うアフリカ人の強制連行による大西洋奴隷黒人貿易が行われた(浜, 2007)。また、カリブ海域に無かった作物などがヨーロッパから導入されたことにより、全く新しい社会経済構造であるプランテーション<sup>1)</sup>が誕生した。黒人奴隷貿易と、プランテーションという政策はいずれも、カリブ海域に進出した各国が取り組んだものであり、3国に共通する政策といえる。

### 3.2.1 スペイン

ヨーロッパの強国の中でもいち早くカリブ海の征服に取りかかったスペインの植民地政策は1492年にコロンブスが新大陸を発見したところから始まる。

羅針盤、造船技術の発達などの科学技術の発達、キリスト教カトリックの普及のための海外発展意識の強まり、ヨーロッパでの香辛料の需要の高まりによる経済的な動機という歴史背景のもと、スペインの大航海時代は始まった。スペインのエルナン・コルテスはカリブ海域の侵略に留まらず、1519年にはメキシコ海岸に上陸、わずか2年後の1521年にはアステカ帝国を滅ぼすなど、さらに中米、南米への進出を果たした。

スペインは統治の際、エンコミエンダ制<sup>2)</sup>を採用し、植民地経営を行った。しかし、キリスト教の広がりとともに、聖職者の反対活動によってエンコミエンダ制の段階的な廃止の規定が定められるようになる（宮崎，1998）。

スペインは16世紀初めから17世紀中頃にかけて黄金時代と呼ばれる一時代を築いた一方で、新大陸産の銀の減少や、オランダ独立運動による多額の軍事費の消費によってスペイン本国の経営は厳しくなっていた（小松田，2002）。そのころ、スペイン本国から多様な階層のスペイン人がカリブ海社会の人々の移民が起き、植民地生まれの純粋なスペイン人の家系（クリオーリョ<sup>3)</sup>）の存続が可能になった。宮崎（1998）はこの集団が衣食住を含めたスペイン文化をほぼ忠実に継承しながら、植民地社会の主導権を次第に握ったと説明する。

このように、スペインは大航海時代の覇権をいち早く得、ヨーロッパ強国の新大陸進出を開拓した。しかし、早々にカリブ海の植民地経営からメキシコなどの、中米、南米大陸の経営に移行したため、カリブ海の言語にはスペイン語の影響があまりないと考えられる。また、メキシコにおいても、カトリック修道会とスペイン本国の意見の不一致や、大量にスペインから移民した人々のスペイン社会の形成などによって、クレオール語が生まれる環境がなかったと考えられる。

### 3.2.2 フランス

もともと1492年にコロンブスが新大陸を発見し、カリブ海へスペイン人が入植を開始した。しかし、井上（2012）によると、フランスの支配した植民地でない地域にも、フランス語系クレオール語がカリブ海域の島々に存在しているという。その理由について考えるにあたり、今回ラテンアメリカで初めて独立し、国家を築いたハイチ共和国について主に取り上げていきたい。

ハイチの属するイスパニョーラ島は元来スペインの支配する島であった。しかしスペイン人の多くが中米、南米へとその富を求めて移動したためイスパニョーラ島には、ここで細々と生計をたてる農民しか残らなかった（井上, 2012）。一方、フランス海賊はこのトルテュ島を根拠地とし、イスパニョーラ島の西部地域に侵入を繰り返していたが、1697年、フランスはスペインに対して、この地域をサン・ドマングと名付けた（井上, 2012）。スペインが力を入れなかったさとうきびプランテーションの開拓をフランス人は大々的に行い、アフリカ人奴隷が多数輸入されることとなった。こうしてハイチではフランス植民者とアフリカ黒人奴隷によって社会の中核が構成されることとなりフランス語を基礎とする言語が生まれた。

### 3.2.3 イギリス

ここでは英語系クレオール語について考えていく。中でも、ジャマイカ島について取り上げていきたい。

スペイン人は1494年に本格的にジャマイカ島の植民地経営に乗り出したものの、植民地の経営は成果があがらず、先住民の生活は衰退していった。1524年に島の南東部にスパニッシュ・タウンが開かれるとスパニッシュ・ジャマイカは安定の兆しを見せ、カリブ海航海の中継地、周辺入植者の経済活動の中心地として着実に富を蓄積していったが、それにより、列強の争奪的となった結果この地をスペインから奪ったのがイギリスだった（遠藤, 1999）。1653年にイギリスで護国卿となったオリヴァー・クロムウェルは、スペインからカリブ海域の覇権を奪おうとした（今泉, 2006）。1655年にイギリスはスパニッシュ・タウンを攻略し、それ以降、本格的なブリティッシュ・ジャマイカの時代が始まったと言える（遠藤, 1997）。また、当時はアフリカ出身の黒人奴隷が17世紀以降のジャマイカの主な労働力の担い手となっていた（遠藤, 1997）。

このように、産業革命によって、ヨーロッパの覇権を握ったイギリスは、ジャマイカの領有権をスペインから得た。もともとは、スペイン領有地であったわけだが、イギリスとスペインの覇権が交代したため、奴隷と主人の間でコミュニケーションを行う際は英語が基盤として使われることとなった。ジャマイカの先住民の衰退と、アフリカ人奴隷の輸入が、アフリカ言語を基層に持つ、英語基盤のクレオール語の誕生につながったと言えるだろう。

表1 各国の取り組みについて

	スペイン	フランス	イギリス
植民開始	1492年	16世紀終わり～17世紀初め	1655年以降
宗教	カトリック	プロテスタントカルヴァン派	イギリス国教会
対象地域	主に南米	イスパニョーラ島	キューバ、ジャマイカ
政策の特徴	エンコミエンダ制	・プランテーション ・海賊による侵略 ・ハイチからトリニダードまで自由に活動することで広範囲の先住民やアフリカ人奴隷との関わりを持った。	産業革命によってスペインからカリブ海域の覇権を奪う
独立年	カリブ地域には該当なし	1804年（ハイチ）	1962年（ジャマイカ）

#### 4. 現在残るクレオール言語について

##### 4.1 スペイン語系クレオール語

これまで述べたように、スペインはカリブ海域開拓にいち早く取り組んだが、プランテーションの開拓よりも、南米大陸への進出に力を入れた。そのため、カリブ海域に現在まで残っているクレオール語はほとんど無く、カリブ海域でのスペインの影響はあまり無いと言えるだろう。キューバや、ドミニカ共和国では、スペイン語が公用語となっているが、それらはクレオール語ではなく、あくまでスペイン語である。

##### 4.2 フランス語系クレオール語

[分布]

ハイチクレオール語はハイチ共和国で主に話されている。ハイチ共和国では、ハイチクレオール語（以下、ハイチ語と記す）とフランス語が公用語となっているが、520万人の国民の内、100パーセントがハイチ語話者であり、そのうちフランス語話者は約10パーセントである（西江, 1992）。つまりハイチ共和国では二言語を併用する人々があり、公的には二つの言語が社会に併存しているといえる（立花, 2009）。ハイチ語はフランス語との二言語併用によって今でもハイチ共和国内で使用され、世界中のクレオール諸語の中では最も多くの話者を持ち、かつ安定度が高いとされる。

### [使用状況]

1980年代中頃にはハイチ語は、メディア、文学（小説、詩、戯曲など）でフランス語と併用して使われていた。ハイチ語の学校教育への導入や、1987年のハイチ語の公用語化によって、2007年の統計では識字率が62パーセントになっている。ハイチ語の地位は間違いなく上昇しているといえるだろう（井上, 2012）。また、以下のハイチ語に関する例（図2、3、表2、3、4、5、6、7）は西江（1992）によるものである。

### [変種]

ハイチ語の代表的な変種には、地理的、社会的、文体的、三つの要因に基づくものがある。

地理的変種、すなわち諸方言については首都方言、北部方言、南部方言に分けられる（地図2参照）。各方言の差は主にいくつかの日常単語の形式の違いで、発音面や文法面での違いはそれほどないものと考えられる（西江, 1992）。



図2 ハイチ語の地域的変種

社会的変種は主に発音面でフランス風（都会風）であるかないか（田舎風）に分かれ、都市の住民とそれ以外の住民の関係に現れるが、それも話者のフランス語の知識量、識字程度のレベルなどにより一定ではない（西江, 1992）。

文体的変種は、主に日常会話においては、人称代名詞の母音省略のようなものによって表現される（西江, 1992）。

例) li te re u → l'te re u 「彼は私を呼んだ」

表 2 例

都会風	田舎風	意味	対応するフランス語
[dyri]	[diri]	米	du riz
[vjäd]	[vjän]	肉	viande

[音素]

ハイチクレオール語の音声的特徴は、アフリカ系住民が話していた諸言語の音声特徴がほとんどみられないということである。西アフリカの諸言語にはごく普通である音声の種類のみではなく、単語的、または文法的な音調の欠如という現象にも現れている(西江, 1992)。フランス語に比べ、母音の数が少ない、ということが挙げられる。また、子音に関しても /f/ /v/ の音がなくなっている。



図 3 ハイチクレオール語の音韻体系

[基本文型]

基本文型は以下表 5 の通りの 3 種に分けられる。

表 3 基本文型

S + V	S + V + O	S + V + O (間接) + O (直接)
li pati	li pale fräse	li di u adres li
彼は 出発する	彼は 話す フランス語を	彼は 言う あなたに 彼の住所を

[名詞]

歴史的にフランス語から成立したものが多くフランス語に比べて語彙数が少ないため、単語が意味する範囲が広いという特徴を持つ(立花, 2009)。

[定冠詞・数詞]

定冠詞的な用法は表 4 に、参照のとおりである。数詞は、「1」のみ数形容詞 jò をも

つが、その他は基数詞 + 名詞で数形容詞の役割を果たす（西江, 1997）。

表 4 定冠詞

単数	複数
la	jo
liv la	liv jo
本 その	本 それらの
その本	それらの本

[人称代名詞、所有代名詞]

人称代名詞は主語、目的語、所有形として不変化の形で使われる（表 5 を参照）。また、所有代名詞は表 6 を参照（西江, 1997）。表 5 と表 6 を比べると、人称代名詞、所有代名詞が同様の表現をする場合がある。

表 5 人称代名詞

単数	複数
1 人称 mwɛ̃ ~ 'm	nu
2 人称 u	nu（1 人称と同じ）
3 人称 li	jo

表 6 所有代名詞

単数	複数
1 人称 mwɛ̃ ~ 'm	pa'm ~ pamwɛ̃ nu pa nu
2 人称 u	pa u nu pa nu
3 人称 li	pa'l ~ pa li jo pa jo

[動詞]

動詞の時間表現は時間表現辞 + 動詞によってなされる（表 7 参照）。時間表現辞の多くは時制表示ではなく、相表現である。ハイチ語には受け身の概念がないため、普通、受け身形という文法形式は使用しない。



表7 時間表現辞

時間表現辞	意味	例
a	するだろうと思われる行為、不確実な行為を表す	l'a fate. (l'a ← li a) 彼は歌うだろう。
ap	継続している行為、しようとしている行為を表す	l'apfate. 彼は歌っている最中だ。
o	事実としての行為を表す	liofate. 彼は歌う

[話者の意識]

近年、ハイチ語の学校教育への導入や、識字率の上昇によって、国内の教育、政治場面での使用は急速に広がりを見せ、国内において今後確固たるものになることも考えられる。国内におけるハイチ語の広がりとともに、ハイチ語が今まで以上に自分たちにとって唯一の言語であるという意識を生むことが出来るだろう。だが、一方で、ハイチ語をフランス語に近づけて使用し、脱クレオール語化が起きていることも事実だ。現在でも多くのハイチ人はハイチ語には言語体系の無い言語と考えている人が多く、フランス語の出来る少数の上流層ほどハイチ語を軽蔑し、フランス語を優位と考える傾向がある(井上, 2012)。確かに、フランス語は国際的に通用する言語であるため、社会的上昇を望む場合、ハイチ語に加えて、フランス語を習得することも必要不可欠である。そのため、母語としてハイチ語、海外との共通語としてフランス語を使う、二言語併用に政府を挙げて取り組んでいる。

### 4.3 イギリス英語基盤のクレオール語

[分布]

西インド諸島、ジャマイカ島ほぼ全土に合わせて200万人以上の話者を擁する(細川, 1998)。この話者たちは西アフリカから奴隷として連れてこられた黒人たちの子孫を指す(杉本, 2008)。

[使用状況]

細川(1989)によると、ジャマイカンクレオール語は、「ジャマイカ英語」とも呼ばれ、民衆言葉(folk speech)、ペトワーなどとも呼ばれることがある。田中(2012)によると、ジャマイカンクレオール語は英語に限りなく近いジャマイカ訛りの英語(上層語)から、ジャマイカ人が日常会話やお互いの仲間意識を強める時に使うクレオール語(下層語)

にいたる、連続体の存在がある。下にまとめた特徴は上層語と下層語の両方の特徴を持つ、中層語に見られるものである。以下のジャマイカンクレオール語に関する例およびデータは（杉本, 2008）によるものである。

[音韻]

ジャマイカンクレオール語には奴隷の多くが連れてこられたアフリカの発音に似たものが残っており、いくつかの音韻的特徴が存在する。

1) 「語尾子音連結」の単純化、簡略化、および脱落

例) accep < accept

2) 子音 /l/, /d/ の母音化および脱落

例) azways < always

音素 /l/ が半母音に変化し、つづり字にも反映

例) direc < dialect

3) 語頭・語中・語尾の音が欠落することがある（表 8 参照）。

表 8 例

語頭	ca/caa/caw catch/cratch	Because scratch
語中	Febry	February
語尾	braa/bra/brea diss/dis	brother disrespect

4) 語頭や語中に /k/, /w/, /y/, /t/, /b/, /n/, /g/ などの子音が挿入されることがある。

例) bwaile/bwile < boil

5) /σ/ が /d/ に、/θ/ が /t/ となる傾向がある

例) adda/ada < other

6) 母音直後で /r/ が発音されない

例) afta < after

7) /k/ の多用

例) bokkle/bokl < bottle

[語彙]

現在、語彙の大部分が英語に由来するもので占められているが少数ながらもポルトガ

ル語、スペイン語由来の語彙も残っており、西アフリカ諸言語に由来する語彙はかなりある（細川，1989）。

#### [文法]

文法についてはイギリス英語とほぼ変わりが無いが、地理的理由や、密接な経済関係、文化的な影響によって、アメリカ英語の影響も多く受けており、名詞や動詞の屈折語尾が欠けるなどの簡略化が起きている（田中，2012）。

例) mi fada book < my father's book

#### [話者の意識]

大半のジャマイカ人は標準英語からジャマイカンクレオール語までを状況や対話者に応じて使い分けている。このコード・スイッチはほとんど無意識のうちに行われることが多いが高等教育を受けていないと、意図してもうまくコード・スイッチが出来ないこともあると柴田（2009）はいう。

ジャマイカンクレオール語は長い間の植民地時代を通して誕生した言語であるため「崩れた」言語である、という認識が長い間存在した（柴田，2009）。そのため、ジャマイカンクレオール語においては、より標準英語に近づけようとし、クレオール語が上層言語に近づく、脱クレオール語化が起き、標準英語との言語的な相違は減少しつつある（田中・田中，2012）。これらは、ジャマイカンクレオール語と基盤となった標準英語を比べた際に、発音、語彙、文法、統語論などの不完全性に由来するものだと考えられる（柴田，2009）。ジャマイカンクレオール語は話者にとって劣勢言語であるという意識が拭えずにいる。しかしジャマイカンクレオール語は、彼らの日常生活に深く根付いているものであり、彼らの身近な言語であることに変わりない。その様子はかれらの文化の中によく見られ、ジャマイカンクレオール語の活躍が見られる。特にレゲエ音楽などに多くジャマイカンクレオール語が見られ、自分たちの象徴として言語を捉えているようだ。伝統的な文化の中であえてクレオール語で表現しているということはジャマイカンクレオール語が彼らのアイデンティティの一部となっているからだろう。

表9 ハイチ語とジャマイカンクレオール語の比較

[共通点]	[相違点]
基盤言語の簡略化	使用状況
脱クレオール化	正書法の確立
話者の意識	

## 5. 植民政策がカリブ海域に与えた影響について

ヨーロッパ列強国の新世界進出によって、植民地が誕生し、主人と奴隷という関係が生まれた。この主人と奴隷という関係が、ピジン語、クレオール語の誕生に大きく関係していると考えられる。上位と下位の関係によって、上位の言語を基盤とした言語が誕生した。奴隷制度とプランテーションという背景をもとにカリブ海域のクレオール語が誕生したといえる。

三国は、同様に植民地政策を行ったが、その政策によって生まれた言語は、カリブ海域において現在それぞれ異なる立場にある。スペインにおいてはクレオール言語が生まれるまでに至らなかった。その要因は、やはり政策の違いによるものと考えられ、フランスの海賊が行った侵略は、スペインやイギリスの行った政策とは明らかな違いが見られた。

また、近年の各国のクレオール言語に対する取り組みの違いも、現在残るクレオール言語の立場に影響を与えている。ハイチ語とジャマイカンクレオール語は政府の取り組みの違いが見られ、使用状況や、正書法が確立しているか否かが話者の意識に大きく関係しているように考えられる。

公用語として国内で活躍するハイチ語、レゲエ音楽などの文化的な表現として活躍ジャマイカンクレオール語はそれぞれ異なる方法ではあるが、今後も現地の人々に使用され、彼らのアイデンティティを示す重要な役目を担っていくことが予想される。

## 注

- 1) ヨーロッパの資本がアフリカ人奴隷労働力を用いて砂糖、コーヒー、ココア、綿、タバコ、インディゴなどの熱帯商品作物に特化して生産を行う大規模な農業経営のことを指す。カリブ海域において最も重要だったのは砂糖プランテーションである。
- 2) エンコミエンダ制とは征服者に土地、住民の支配を認める制度。これにより先住民が酷使さ

れた結果絶滅につながった。

3) クリオリーヨとは、ラテンアメリカの社会構造において成立した社会階層のひとつ。

### 参考文献表

- 井上兼行 (2008) 「カリブ海におけるクレオール語とアイデンティティーその1」『マテシス・ウニヴェルサルス』 10巻1号 pp. 1-30 獨協大学国際教養学部言語文化学科
- 井上兼行 (2012) 「カリブ海におけるクレオール語とアイデンティティーその3」『マテシス・ウニヴェルサルス』 13巻1号 pp. 71-95 獨協大学国際教養学部言語文化学科
- 今泉博 (2006) 『世界史 B 世界史の完全整理 改訂版』 山川出版社
- 遠藤泰生 (1999) 「もうひとつの『多からなる』: ジャマイカの 아프리카系住民に見るアフリカン・アイデンティティの交錯」『東京大学アメリカン・スタディーズ』 4号 pp. 31-41 東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ研究資料センター
- 大角翠 (1979) 「クレオール文法の概略」『共立女子短期大学文科紀要』 26号 抜刷 共立女子短期大学文科
- 掟順治 (2005) 『現代スペインの歴史—激動の世紀から飛躍の世紀へ』 彩流社
- 小松田直 (2002) 『手にとるように世界史がわかる本』 株式会社かんき出版
- 柴田佳子 (2009) 『パトワとエスニック言語の交錯』 畑恵子・山崎眞治 『ラテンアメリカ世界のことばと文化』 pp. 230-251 早稲田大学国際言語文化研究所
- 杉本豊久 (2008) 「現代英語の変異性—トク・ピシン、ジャマイカンクレオールおよびグラスコー方言の音韻とつづり字の比較—(1)」『成城大学共通教育論集』 1号 pp. 59-79 成城大学共通教育研究センター
- 杉本豊久 (2009) 「現代英語の変異性—トク・ピシン、ジャマイカンクレオールおよびグラスコー方言の音韻とつづり字の比較—(2)」『成城大学共通教育論集』 2号 pp. 17-42 成城大学共通教育研究センター
- 柴田秀藤、篠原愛人 (2005) 『ラテンアメリカの歴史 史料から読み解く植民地時代』 世界思想社
- 第一学習社編集部 (1997) 『最新世界史図表 三訂版』 教育図書出版 第一学習社
- 立花英裕 (2009) 「カリブ海のフランス語圏クレオール文化」 畑恵子・山崎眞治 『ラテンアメリカ世界のことばと文化』 pp. 215-229 早稲田大学国際言語文化研究所
- 立岩礼子 (2009) 「ラテンアメリカにおけるスペイン語の普及」 畑恵子・山崎眞治 『ラテンアメリカ世界のことばと文化』 pp. 19-36 早稲田大学国際言語文化研究所
- 田中幸子 (1994) 「ピジンとクレオール」 田中春美 『入門ことばの科学』 pp. 183-202 大修館書店
- 田中春美、田中幸子 (1996) 『社会言語学への招待』 ミネルヴァ書房
- 田中春美、田中幸子 (2012) 『Worlds Englishes—世界の英語への招待—』 昭和堂
- 西江雅之 (1992) 「ハイチ・クレオール語」 亀井孝、河野六郎、千野栄一 pp. 68-77 『言語学大事典』

第3巻世界言語編』三省堂

西江雅之 (1998) 「〈出会い〉の言語学 [11] クレオール大国 ハイチ」『月刊百花』442号 pp. 53-56  
平凡社

畑恵子 (2009) 「ラテンアメリカ世界への誘い」畑恵子・山崎眞治『ラテンアメリカ世界のことば  
と文化』pp. 3-16 早稲田大学国際言語文化研究所

浜忠雄 (2007) 『ハイチの栄光と苦難—世界初の黒人共和国の行方—』刀水書房

細川弘明 (1989) 「ジャマイカ・クリオール語」亀井孝、河野六郎、千野栄一 pp. 201-202 『言  
語学大事典 第2巻世界言語編』三省堂

宮崎和夫 (1998) 「スペインの新大陸新出」立石博高『スペインの歴史』pp. 98-105 昭和堂

山崎眞治 (2009) 「ラテンアメリカの先住民語」畑恵子・山崎眞治『ラテンアメリカ世界のことば  
と文化』pp. 129-146 早稲田大学国際言語文化研究所

### Abstract

Common languages are essential for communicating with family, friends and one's own community, and make relationships strong. However in the past, there were very unique situations when people could not understand what they said to each other. The European countries spread their colonies from the 16th century to the 17th century to get power around the world. As a result, many languages including European and African languages were gathered in the Caribbean area. In the colonial period, slaves needed to have a language to know what the owner said to them, and then they used simple words their owner use. It is the pidgin language that people produced at that time. After that, the pidgin language became more complicated, and it changed to creole language.

I picked three European countries, Spain, France and the U.K., and examined Haitian and Jamaican creole in this paper. These two languages are influenced from European countries. Except for Haitian Jamaican creole, most of creole languages in the Caribbean are disappearing now. There are many reasons for this. I paid attention about the histories and policies in each country, and then I considered about linguistic features of the creole language, the situation of the user and the language awareness. From this research, I discovered the difference of actions the European countries tried in the Caribbean area. Because of the differences, the Caribbean creole languages were created in a similar environment, but they are located at different positions in each country. I am going to explain about the reason why this has happened, and suggest how the creole languages should be for surviving in the future.